

特集

指導と学習の 改善につながる評価

今号の特集は「学習評価」。

「児童が身につけた力を的確に捉えるには」

「教師の指導改善や児童の学習改善につながる学習評価とは」

日々のご実践で先生方が感じる疑問やお悩みについて、

Q&Aや実践例をとおして考えていきます。

提言 評価の原点

横浜国立大学教授 高木まさき

学習指導要領が改訂されると、当然ではあるが、新しい評価の観点や手法に目が向きがちになる。だが評価は何のために行うのか。その原点を忘れてはいけない。

そもそも私たちは、日常的に自らの行為を評価しながら、その最適化を図っている。店に買い物に行くことを例にしよう。ふだんの道順はほぼ決まっている。だが急いでいるときは路地を抜けることもある。余裕があれば、少し遠回りして季節の花々が咲く並木道を選ぶかもしれない。けれども、帰宅した後、思わぬ荷物の重さに、次は自転車で大通りを行こうなどと考えたりする。このように私たちは日常の些細な行為についても、目標の設定、実行、評価、改善を繰り返している。評価は評価者自身の行為に向けられ、目標達成

のために行為が選択・改善されていく。

教育の場ではどうか。気になるのは学び手を格付けすることに熱心な評価者の姿だ。だが教育が個々の学び手の資質・能力を高める行為であるとするならば、評価の矛先は教師の行為（指導）にこそかえってこなくてはならない。学び手の意欲が高まらず、格差が生じているのなら、なおさらだ。多様な学び手を相手に至難なことではある。だが多くの教師は知っているのではないか。悩み抜いた末に教師が選んだ一言（方法）が、子どもの学びに向かう姿勢を大きく変えることを。評価とは子どもを介して教師が自らを見つめ直す営みだ。指導と評価の一体化とは、そのような意味をもつ。評価は教師の成長を支えるのだ。



高木まさき

静岡県生まれ。横浜国立大学教授。全国大学国語教育学会理事、日本読書学会理事など。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）、『情報リテラシー 言葉に立ち止まる国語の授業』（編著 明治図書）など。